

タイトル:平成 28(2016)年度 研究セミナー(第 17 回)

日程:平成 28 年 12 月 16 日(金)~18 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「君主制国家のための同盟 — 脅威認識による同盟の形成と政治体制」

村上 拓哉(中東調査会)

私がアジア・アフリカ言語文化研究所の主催する次世代研究者養成プログラムに参加するのは、2013 年のベイルート若手報告会以来のことである。3 年ぶりの参加となったが、今回の研究セミナーも刺激に満ちた場であった。

今回は執筆予定の博士論文の第 1 章にあたる「君主制国家のための同盟:脅威認識による同盟の形成と政治体制」と題する報告を行った。これは、湾岸地域の安全保障秩序において湾岸協力理事会(GCC)がどのような役割を果たしているのかという問いについて、同盟形成論の枠組みを用いて分析することを企図した研究である。

報告は 1 時間発表、1 時間質疑応答の計 2 時間が各受講者に割り当てられていたが、私は予定より 10 分程早く発表が終わってしまった。しかし、質疑応答は当初の予定時間を押して行われた。自身の発表に対し 1 時間以上に渡ってコメントをいただくという経験はこれまでにほとんどなく、実に多くの学びを得ることができた。事実関係を確認するものや、発表中に触れられなかった問題についての質問もあったが、コメントの多くは研究内容や発表方法について建設的な視点から提言していただくものであった。たとえば、GCC の役割の時代による変化など議論の対象の時間的区分を明確にするべきということに関して、複数の方からご指摘いただいた。また、先行研究批判や論文の中心的な概念について十分な整理ができていないという厳しくも的確なコメントもあった。他にも、発表の一部について誤解を生じさせてしまったことについて、表の書き方を工夫すべきだったという技術的な指導もいただいた。

自分は現在、研究機関で勤務しているが、仕事の多くは日々の情勢分析や機関誌の編集などであり、学問的な課題に対して長期的な視点から取り組むということを日常的にできているわけではない。そのため、今回のセミナーで、自身の専攻とは違う第一線の研究者の方々から長時間に渡る指導を受けることができたのは大きな収穫であった。また、博士論文の執筆時間もあまりとれない中、セミナー受講を機に改めて正面から論文と向き合うことができたのも、貴重な機会となった。自分一人で取り組んでいてはなかなか答えが見つからない問題でも、多くの人に見てもらうことで一挙に解決の道筋が見えてくることもある。三人寄れば文殊の知恵というが、十人の専門知が集まればどれだけの知恵が得られるのか。そのようなことを実感させてくれる濃密な 3 日間であった。